

「日本地質学史に関するインタビューおよびアーカイブ資料調査の経験から」 発表要旨

栃内文彦¹

本発表では、発表者がこれまでに行ってきた科学史（近現代日本地質学史）の調査・研究から得られた知見の内、本ワークショップの趣旨に関わるものを紹介した。それらは大別して、発表者がこれまでに行った地質学者らへのインタビュー調査（内容・期間で2000～02年、07～08年の二つに分けられる）と、地質学者 坪井誠太郎²について体系的に収集された資料の調査に分けられる。

2000～02年にかけてのインタビュー調査は、当時の研究テーマ³に関して、オフィシャルに残されている資料（関係者らによる著作、学術誌などに掲載された対談記録類、など）から導き出される事実関係や考察を確認したり、残されている資料（つまり、公式な資料）の“行間”や“文脈”を把握したりすることを目的として行った。インタビューの相手は、発表者の研究対象であり、あらかじめおおまかな質問項目を送付し、それに沿って聞き取りを実施した⁴。

2007～08年にかけてのインタビュー調査は、発表者の科学史研究と、発表者が勤務校にて携わっている技術者倫理に関する教育・研究をまたぐ内容で、科学者・技術者の倫理的意思決定の判断基準となる価値観を体系的な聞き取り調査から抽出することを目的に実施した⁵。この調査は、当初から体系的に実施するつもりだったので、事前に送付した質問項目は全て共通とした。

発表者が現在関わっているのが、社会情報研究資料センター（東京大学大学院情報学環附属）により体系的かつ大量に収集された坪井誠太郎に関する資料の調査である。同資料は、同センターが実施した坪井正五郎資料の収集およびアーカイブ構築に際し

¹ 金沢工業大学 基礎教育部。E-mail : tochinai@neptune.kanazawa-it.ac.jp。自己紹介は、文末をご参照。

² 1893-1986年。1914年、東京帝大入学。17年卒業、助手として地質学教室にとどまる。23-54年、同教室を率い、物理学・化学的手法を用いた研究を進める。日本地質学界の“頂点”として、学界に大きな影響を及ぼした人物で、発表者の主要な研究対象である。

³ 日本地質学界に物理的・化学的研究手法が導入される過程についての研究。

⁴ 行ったインタビューは9件（内2件は、文書による回答）。

⁵ 2006-07年度に科学研究費補助金による「日本人地質学者の倫理観・価値観の変遷—体系的聞き取り調査による資料収集・分析—」（若手研究（B）：課題番号18700673）として実施。インタビューの件数は10件（内2件（2名）は、2000-02年でもインタビューを実施）。

て、併せて収集されたものである。同センターに科学史（地質学史）の研究者がいないため、発表者が同資料に接する機会を得た 10 年中ごろの時点では、一部が日付やタイトルなどがデータベース化されただけで（それでも相当量になるが）、段ボール箱で約 250 箱分が仮置きされていた。その内の 50 箱について 11 年中ごろまでの約 1 年をかけて概要調査を実施した結果、坪井に関する従来知見を裏付ける資料の他、研究ノートや写真などの資料が含まれていることが分かり、資料としての価値は高いと思われる。

このような調査・研究は様々に行われていても、それらは散在しており、十分に活用されていないことが多いように思われる。高度科学技術社会において、STS 研究の重要性が増している⁶。アーカイブの専門家らと共同するなどして、STS 研究者のソースなどの共有化を図ることが本質的に求められているのではないだろうか。

<発表者の自己紹介>

■略歴

1994 年、国際基督教大学教養学部理学科卒。電気部品メーカーに入社。3 年半あまりの間、東京やシンガポールで営業に携わる。2001 年、北海道大学大学院理学研究科物理学専攻（科学史研究室）修士課程修了。04 年 3 月同博士課程単位修得退学（05 年 3 月学位取得）。04 年、金沢工業大学講師、08 年、同准教授。

■専門

科学史（日本地質学史）・科学技術社会論・科学技術倫理・初年次教育

⁶ この観点で、社会の一般の人々との接点の多い地質学分野は極めて興味深い研究対象といえる。実際に、発表者がインタビュー調査を行った地質学者らは、概して、（研究者としての）社会的責任を強く意識していた。